



Title	中島敦「李陵」論：他者との対峙
Author(s)	廖，秀娟
Citation	阪大近代文学研究. 2006, 4, p. 58-74
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/92639
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

中島敦「李陵」論

——他者との対峙——

廖 秀娟

一、はじめに

「李陵」は、作者の清書を経ず、草稿のまま世に遺され、その後、深田久彌氏によつて「李陵」と名付けられ、昭和十八年七月に『文学界』に発表された。先行研究を概観すると、大まかに三つに分類することができ、⁽¹⁾ いずれの論点から検討するにせよ、「運命の悪意」がテーマであるとする読み方を論者たちが無条件に受け容れているという点では同様である。つまり、李陵、司馬遷、蘇武の三人が「不可視の世界の不条理な潮流に対峙し」、「世界のきびしい悪意」⁽²⁾に翻弄された悲劇的な人物として描かれているという見解である。「李陵」は、彼等三人の「運命の悪意」との闘いの物語として認識されてきた。

後に、勝又浩氏は蘇武に着目し、蘇武は「李陵の目を通してのみ描かれ」、「独立した人物として」⁽³⁾扱われていないことを指摘し、李陵や司馬遷と並べて同列に論じることの退け

た。その後の論考は李陵と司馬遷に重点が置かれるようになったが、「運命の悪意」との対峙という観点は依然根強い。

一方、三部構成となる本作品において、一章と三章は李陵を、二章は司馬遷を中心としている。各々の章の関連性が薄いため、作品に描かれた李陵と司馬遷との関係をどのように捉えるかが従来論議の対象となってきた⁽⁴⁾。確かに諸氏が指摘した通り、二人の関係そのものは薄いと言える。しかし、本作品をつぶさに考察すれば、人物像には両者に共通するものが見出せる。本論では、彼等の共通するところに着目することによつて、「運命の悪意」という論点から脱却できていない「李陵」論に新たな読みを提示したい。

二、「不可能」への挑戦

従来の「李陵」論において、「運命の悪意」という解釈のコードが常に付きまとっている一因は、もっぱら、路博徳の

武帝への「上奏文」にあると言える⁽³⁾。

「年齢からいつても李陵とは父子ほどに違ふ。曾ては封侯をも得たその老将が今更若い李陵如きの後塵を拜するのが何としても不愉快だった」と、語り手は路博徳の心中を叙述した。しかし、そのような感情が、彼の上奏文呈上の動機であるとは、明確に示されていない。にもかかわらず、これまで、議論は路博徳の「不愉快」に集中し、上奏文の内容自体に目を向けることがないままであった。そこで、今一度先入観を排し、上奏文の内容に立ち戻る必要がある。

今正に秋とて匈奴の馬は肥え、騎馬戦を得意とする彼等の鋭鋒には寡兵を以てしては些か當り難い。それ故、李陵と共にこゝに越年し、春を待つてから、酒泉・張掖の騎各五千を以て出撃した方が得策と信ずる。(二)

彼は季節や敵の状態を配慮した上で、寡兵を率いている李陵では匈奴の騎馬隊に当り難いと判断したことがわかる。更に路博徳の長年の戦闘経験や実際に辺地にいることから見て、彼の下した判断が武帝や李陵より適切なものである可能性が高い。その証左になるのは、「確かに無理とは思はれたが」という李陵自身の言葉である。そして、李陵の敗戦の報が長安の都に達した時、「武帝は思ひの外腹を立てなかつた。本軍たる李廣利の大軍さへ惨敗してゐるのに、一支隊たる李陵の寡軍に大した期待のもてよう道理が無かつたから」。

すなわち、李陵の北征は最初から「無理」と思われ、戦果

を期待されていない出征だったのである。路博徳の上奏文は、運命の悪意に起因したものでなく、むしろ武帝と李陵に実状を示したものであった。また、李陵の無謀な行為はこの一箇所止まらず、李陵が単于の帳房で目を覚ました場面にも見当たる。

作中で李陵は、単于の首を取るということは「非常な機会に恵まれない限り、まず不可能である」と承知しているにもかかわらず、「辛抱強く、その不可能とも思はれる機會の到來を待つ」ことに決めている。すなわち、李陵は自らの行動が「無理」「不可能」であると認知しながらも、なお無理を冒すことを選んだのである。これらから、李陵の人生を暗転させたのは、従来根強く思われてきた「運命の悪意」や路博徳、ひいて武帝の「我儘」ではなく、むしろ李陵自身の行為にあることが明らかであろう。

そこで、李陵が何故無謀な行動をしたのか、その理由を探ってみる。李陵は、天漢二年夏の戦役で「輜重の役」を当てられたが、彼は懸命にその役を免じてもらえよう武帝に嘆願している。早くから指摘されている如く、「輜重の役」は軍事物質の運輸などをする役であり、匈奴との戦いの上で直接的な戦闘はしないものの、それと同じくらいに重要な役割である⁽⁴⁾。しかし、それに当てられるよりは、むしろ匈奴との直接的な戦闘を李陵は望んだ。彼の嘆願を聞いた武帝は、「生憎陵に割くべき騎馬の餘力が無い」と李陵に告げたが、

李陵は「それでも構はぬ」と答えた。しかし、語り手は第一章で、騎馬兵を連れず歩兵ばかり匈奴へ侵入することは「無謀の極み」と語り、「騎馬を持たぬ軍隊にとつては甚だむづかしい」と繰り返し述べており、決して「構はぬ」と言つて退けられる程度の問題ではない。この行動の無謀さは、武帝や路博徳ひいて李陵本人をも含めて「誰にも明らか」である。しかしながら、李陵は、「己の為」に生命を惜しまぬ部下五千と共に危うきを冒すという戦闘方法に固執している。李陵の嘆願を通して、彼の戦争における自らの役割へのこだわり、つまり、「武將」という役割へのこだわりが明白に映し出されることになった。このようなこだわりは、他の場面での李陵の行動にも見当たらる。

第一章の末尾で、敗北が決定的になったと知った時、軍吏の一人が、泥野侯趙破奴が漢に「亡げ歸つたこと」を取り上げ、李陵に「逃れ帰ることを勧めたが、李陵は「陵一個のことは暫く措け」とそれを遮つた。混戦の最後に李陵は、「最早天子に見ゆべき面目は無い」と思い、戦場に取つて返し自らの死を覚悟する。部下の提案を遮り、戦場に戻る行動から考えれば、李陵は最初から漢に逃れ帰ることを考えていなかったと言えよう。そこから見えてくるのは、李陵の自らの死に方へのこだわりである。

打撃を受け失神した李陵は、単于の帳房で目を覚ました時に、脱走することを選んだ。しかし、それは単に脱走するの

ではなく、「敗軍の責を償ふに足る手柄」つまり、単于の首の獲得がその条件である。換言すれば、帰国するとしても李陵が自らに期した形、又はそれに見合つた方法でなければならぬのである。

以上のことから、彼はある種の規定や規範を持ち、それに基づいて行動していることが明らかになった。言い換えれば、李陵はそれらの規範に基づいて、自らの武將としての有り得べき「自己像」を形成しており、その「自己像」に見合つた行動をすることを自らに課しているのである。軍用物質に携わる役や敗軍して漢に逃げ帰ることなどは、彼が自らに對して描いた「自己像」からはみ出るものと考えてよい。

それでは、彼が自らに期した「自己像」とはどのようなものであつたのか。左記に示す司馬遷の言葉が重要な手がかりとなる。

李陵の平生を見るに、親に事へて孝、士と交はつて信、常に奮つて身を顧みず以て國家の急に殉ずるは誠に國士の風ありといふべく、（中略）部下の心を得て之に死力を盡さしむること、古の名將と雖も之には過ぎまい。軍敗れたりとはいへ、その善戦のあとには正に天下に顯彰するに足る。（二）

ここで注目したいのは司馬遷の李陵に対する認識の当否ではなく、右記二重線部を付したところを以て、司馬遷が李陵の行動を「誠に國士の風あり」と評価し、「その善戦のあと

は正に天下に顯彰するに足る」と推奨したことである。つまり、司馬遷が提示した、当時の「國士」、「古の名將」のあり方についての認識である。

司馬遷が提示した認識を念頭に入れた上で、李陵の行動に見られるこだわりを考えてみると、彼が「當時」の人に理想とされる「國士」像に近づこうとしていることは明らかである。すなわち、「國士」と思われる行動——「身を顧みず以て國家の急に殉ずる」（匈奴との実戦を望むこと）、敵である匈奴を奔命させ、「死力を盡さしむる」（戦死を望むこと）——を自ら進んで行うのである。以上、第一章に描かれた李陵の行動について分析を行い、彼の行動に窺われるこだわりに着目し、司馬遷の視点を取り入れることによって、李陵が自らに期したのは「國士」としての〈自己像〉であることを明らかにした。しかし、ここで李陵が「國士」としての存在を目指し、それに相応しい行動を自らに課していると結論付けるには、後一つ問題が残されている。それは、越智良二氏³が指摘したように、第一章に見られる「没我的な無私性」の李陵像と、第三章に見られる「対世間的な名譽心に捉われた」李陵像の間に存在するギャップである。すなわち、このような「対世間的な名譽」に執着する一面をみせる李陵が「國士」であると考えることができるのかという疑問が生じるわけである。以下、第三章に見られる「対世間的な名譽」と第一章に見られる「無私性」が、どのような形で李陵の中で存在し

ているのかについて考察を進める。

「後代の我々」、「當時の人間の考へる幸福とは、現代人のそれとひどく内容の違ふものだつたが」といった表現に見られる如く、語り手は作品中において、何度も「後代」や「現代」の我々の考え方と「當時の人間」のものとは決して同様のものではないことを強調している。そこで實在の史書を挙げ、それを作品中の「當時」の考え方を復元する際の一つの手がかりとする。

「列伝第七十太史公自序の最後の筆を擱いた時」と語り手が言及している「太史公自序」の中には、「且夫孝始於事親、中於事君、終於立身。揚名於後世、以顯父母、此孝之大事」⁴というような記述がある。更に、「李陵」の典拠の一つと指摘されている「司馬子長報任少卿書」には、「士」について述べられている一節がある。「僕聞之、脩身者智之符也。愛施者仁之端也。取與者義之表也。恥辱者勇之決也。立名者行之極也。士有此五者、然後可以託於世、而列於君子之林矣」⁵とあるように、名を世に挙げることは士として最大の評價であり、それは自らの行為を貫き業績を挙げることによって導き出される結果でもあらう。作中で、司馬遷は李陵の善戦尽忠の行動に価する報奨として、李陵の名を「天下に顯彰する」べきと武帝に主張する。また、「その跡（蘇武のこと）——筆者（注）が今や天下に顯彰されることになった」という李陵の言説を考えれば、天下に名を挙げることは、「士」が自らの「士

たる者」らしい行為を極めた結果としての表彰であり、最大の名誉であることが窺える。

「今夜の中に圍みを突いて外に出、各自鳥獸と散じて走つたならば、その中には或ひは邊塞に辿りついて、天子に軍を報告し得る者もあるかも知れぬ」、「匈奴は己等の不名譽を有耶無耶の中に葬つて了ふこと必定故、恐らく漢に聞えることはあるまい」という李陵の心理を考えれば、彼が「國士」に叶う行動を取り、その行動が正しく評価されるように強く意識していることがわかる。逆に言えば、李陵は、國に忠を尽くすことと、天下に名を挙げることを表裏一体のことと考え、区別していないのである。彼の中では、自らの手柄が祖國に伝わることへのこだわりは「対世間的な名誉」への執着という形では認識されておらず、むしろ、自らの「國士」としての存在を全うするための一心構えでしかない。李陵の「國士」のように生きようという信念の中では、國のためと自己のためという〈公〉と〈私〉の一体化が生じている。

したがって、李陵が「輜重の役」ではなく、宿敵匈奴軍との接戦を望むという行動の裏には、戦争に勝てば、自らの望む形に「國士」として天下に顕彰されることがある。仮に敗戦したとしても、逃げ帰るよりは、孤軍を率いて戦い敗戦の責任を取って戦死したという己の尽忠ぶりが天子の下に伝わり正しく評価されることで、自らが望んだ「國士」像に見合った形で死んでいくことができる。そこからは、彼の〈自己

像〉の完成への願望が見え隠れしている。

三、司馬遷の挫折

天漢三年の春、李陵が匈奴の捕虜となったという確報に武帝は嚇した。李陵の売國的行為を罵る諸重臣と対照的に描かれるのは、李陵を褒め上げた司馬遷である。司馬遷と李陵は決して親しい仲とは言えないにもかかわらず、何故彼が李陵を弁護するのか。

「自ら顧みて嫉しくなければ、そのやましくない行為が、どのやうな結果を來たさうとも、士たる者はそれを甘受しなければならぬ」と、司馬遷は宮刑された後に、李陵を弁護した自らの行為を分析している。彼は帝に迎合する臣下の「諂諛」、真実に耳を傾けることを嫌う君主の行動に対して「不愉快さ」を感じている。彼の考える「やましくない行為」とは、彼に「不愉快」を抱かせた頭官達の行為とは対極にある行動であつた。一方、注目すべきことは、司馬遷が自らを「士たる者」と称することである。そして、彼が長い間史実を扱っているうちに自然に養った「確信」から、彼の思う「士たる者」の一端が窺える。

之は長い間史實を扱つてゐる中に自然に養はれた考へであつた。同じ逆境にしても、忼慨の士には激しい痛烈な苦しみ、軟弱の徒には緩慢なじめくした醜い苦しみ

が、といふ風にある。(二)

つまり、彼は史実を扱っているうちに、「人間にはそれ／＼其の人間にふさはしい事件しか起らないのだ」という「確信」を持ち、それに則って「激しい痛烈な苦しみ」を待ち受けていた。それは、彼が思い描いた刑罰の種類から窺える。つまり、「斬に遭ふこと、死を賜ふことに對してなら、彼には固より平生から覺悟が出来てゐる」、「刑死する己の姿なら想像して見ることもできる」。司馬遷のこの心情を裏返せば、彼は車裂の刑、腰斬のような痛烈な刑ならば自分にふさわしい死に方であると考へており、「李陵を褒め上げた」行為は「忼慨の士」としてふさわしい行為だと考へてゐることが窺える。

しかし、ここで留意したいのは、司馬遷が李陵を弁護する場面以前に、語り手が武帝及び武帝を囲む諸重臣に多くの描写を費やしたことである。武帝と諸重臣によつて生成された漢の宮廷秩序は、「當時の君主の意の外に何の法があらうぞ」という一廷尉の言葉によつて象徴されている。武帝が諸重臣を召して李陵の処置をはかろうとすること自体に、既に武帝の「意」——李陵に罰を下そうとすること——が剥き出しになつてゐる。そこで、注意を払うべきことは、司馬遷が「當時」の宮廷の秩序、いわば「帝の意」を承知しているのにもかかわらず、自らの意志でそれに逆らつたことである。この点に注目すると、司馬遷と李陵との間に類似点が見出せる。前述

した通り、李陵は「無理」と承知しながら「騎兵を伴はぬ」出征を武帝に懇願した。その懇願の裏には、自らに期した「自己像」——「國士」——を全うしようとする意志が隠されてゐた。それと同様に、司馬遷は自らの進言自体が武帝の意に逆らうものであり、つまり、武帝の李陵への評価やその行為を見直すことに對して、何の効果も及ぼさないものであると承知しながらも、「忼慨の士」としての己を全うしようとしたのである。彼はこのような信念を持つて、自分の運命の先に、肢解や腰斬など「士たる者」にふさわしい死が待ち受けてゐることを覺悟してゐたのである。

しかし、彼に科せられたのは、「最も醜陋な宮刑」であつた。宮刑について、語り手は「男を男でなくする奇怪な刑罰である。之を一に腐刑ともいふのは、その創が腐臭を放つが故だともいひ、或ひは、腐木の實を生ぜざるが如き男と成り果てるからだ」と説明している。これを確認することで、司馬遷が自らに向けたその言葉は、極めて重要な意味を持つてゐることがわかる。

しかし、この宮刑は——その結果斯く成り果てた我が身の有様といふものは、——之は又別だ。同じ不具でも足を切られたり鼻を切られたりするのは全然違つた種類のものだ。士たる者の加へられるべき刑ではない。(二)
「そのやましくない行為が、どのやうな結果を來たさうと士たる者はそれを甘受しなければならない」、「迂濶とい

へば迂濶だが、(といふのは、死刑を豫期する位なら當然、他のあらゆる刑罰も豫期しなければならない譯だから)」とあるように、司馬遷は、自らの「確信」に従い、「正しい」と思つて行動した以上、その行為によつてもたらされた結果が、「足を切られ」ようが、「鼻を切られ」ようが、ひいては「男」ではなくなるが、それらを受け入れるべきであると考えており、又そのつもりであつた。しかし司馬遷はそれにもかかわらず、宮刑を受け止めることができない。なぜならば、自分を「士たる者」であると考え、司馬遷にとつて、「士たる者」として宮刑を甘受することは、同時に宮刑を受けた自分を受け入れることを意味する。しかし、司馬遷の「確信」では、「士たる者の加へられるべき刑ではない」宮刑を受けた者を、「士たる者」と判断しないため、司馬遷は自分を「士」ではないと否定しなくてはならなくなるのである。つまり、司馬遷は自ら持つ「士たる者」の論理と「確信」によつてダブルバインドの状態に陥つていたのである。そして、彼がこのような自家撞着に陥つたのは、宮刑をめぐつて、本来なら補完しあう筈の「士たる者」の論理と「確信」から導き出された条件が相容れなかつたのにもかかわらず、司馬遷はそれどころか捨て去ることができなかつたからである。ここで見えてくるのは、司馬遷の「士たる者」への固執である。「士たる者」としてのあるべき姿へ固執する司馬遷の姿は、(「武將」としてのあるべき姿へ固執する李陵の姿と極めて似通つ

ている。

両者の相似点を整理すると、李陵と司馬遷は自らの中にある〈自己像〉——それは李陵においては「國士」であり、司馬遷においては「忼慨の士」である——にふさわしい行動を取るように期しているのである。そして、彼等はその規範に基づいて行動しており、逆に言えば、彼等の行動は、その規範に制約されていることになる。それが最も顕著にあらわれるのは、辱しめを受ける時である。

作中、司馬遷、李陵、蘇武、そして李陵の祖父李広の行動を通して、一つの共通性が見出せる。それは、辱しめにあう危険性がある、又は辱しめにあわされた時、彼等は自らの命を絶とうとしている点である。彼等が極力辱しめを避けようとし、いざ辱しめられた時に及んでは自らの命を絶とうとするその背後には、自らに規定した「士」としての規範が働いている。したがつて「士」としての自負が傷つけられ、或いは奪われることによつて、誇り高く生きていけないのならば、生き延びる必要がないとまで彼等は考えているのである。

この点を確認することによつて、本作品の前半から後半にかけて大きなテーマの変換があつたことが見えてくる。つまり、作品の前半が、自らの規範に基づいて彼等は如何に行動したのかという点に中心を置いていけるとするならば、後半の中心は、その規範が否定され、恥に晒されることになつた後、彼等が如何に生きていくのかにある。前半では、李陵、司馬

遷はそれぞれ「士」という規範を持ち、その信念を全うする形で死ぬこと——李陵は戦死、司馬遷は諫死——を覚悟していた。

しかし、彼等は自らの望む形で、死を迎えられなかった。自らの規範に基づけば首を刎ねて死ぬはずであったにもかかわらず、生きることになった。そこで武帝の世において、「士」としての存在が否定された彼等が直面しなければならぬのは、自らの信念が覆された後に（如何に生きていくのか）といった課題である。

四、自己との対話

——蘇武の機能から

この小説には、李陵の視線や認識によって構築される世界とは別に、もう一つの視点によって照らし出される世界が存在している。ここで一度焦点を李陵から離し、語り手の語り口に着目してみる。本作品の語り手は、多くの場合李陵の観点や感じ方に即して叙述している。そのため、読者は李陵の心情に添って読むことができる。しかし、この一見李陵の心理に寄り添う語り口の中には、彼を突き放す言葉が混在している。

その一つが官職名の変化である。気を付けて見れば、語り手が作中人物の官職名について「騎都尉・李陵」「太史令・

司馬遷」「漢の中郎將蘇武」などのように、つぶさに述べていることに気付く。その中でも、李陵の官職名の変化に着目すると、李陵が漢か匈奴かと「心は未だにハツキリしない」にもかかわらず、語り手は何度も彼を「匈奴の右校王」と称し、彼を「降將」と決めつけている。確かに、現実世界の視点から見れば、李陵が自らの首を刎ねず匈奴にすることは、既に（降参）したことになり、彼は「降將」とされるのである。語り手は、このように現実世界の眼差しによって李陵をたえず照射しようとする。

それだけではなく、語り手は、「この胡服の大官」、「豪華な貂裘をまとった右校王李陵」と身拵えを示すことで、外側から彼が徐々に匈奴化していく過程を入念に追っている。語り手は、李陵の思惟を叙述し彼に寄り添う一方で、外側からの視線を導入し彼の認識を相対化する働きをすこしも緩めなかったのである。言い換えれば、語り手が外側からの視線を導入するのは、李陵の「やむを得ぬ」という心理によって抑圧されるもう一つの李陵像、いわば他者の視線から見られる彼を浮上させるためである。そこに照らし出されるのは、李陵自身が見る自分と、他者から見られる自分との間にある隔たりである。その距離を李陵に意識させたのは蘇武である。

「持節十九年の彼の名と共に、餘りにも有名な話から、茲には述べない」や、「あの有名な話は、」という語り手の口調から、語り手が蘇武の「持節十九年」の話についての叙述を簡

単に処理しようとしていることが窺える。それに対して、李陵は蘇武を「漢節を持した」義人と見なし、蘇武を極端に理想化したことは早くから指摘されている¹⁰。しかし、何故李陵がひたすら蘇武を理想化するのかという点は考えられずにきた。以下、李陵の蘇武に向けた複雑な心理、特に「避けたい氣持」という屈折した心境に焦点を置き考察を進める。

李陵は、自分が匈奴へ降服した原因を、自分の忠誠を忘れ「變節漢」と見なし、族滅の処罰を下した漢帝国の冷酷さに帰している。その結果、自分の降服を「やむを得ぬ」ものと弁護し、漢から向けられてきた「變節漢」「賣國奴」といった視線に抵抗しようとする。その「やむを得ぬ」があるからこそ、李陵は自らの行動が「決して非」ではないといった信念を持ち得、「變節漢」「賣國奴」といった厳しい現実と対峙し得るのである。しかし、ここで注意せねばならないのは、「如何に無情な批判者」であつても自分が匈奴に降つたことを「やむを得なかつた」と認めるだろうと確信しているにもかかわらず、李陵が「漢節を持した」蘇武との対面を避けていることである。

計らずも自分が匈奴に降るやうになつてから後は、もはや蘇武に會ひたいとは思はなかつた。武が遙か北方に遷されてゐて顔を合はせずに濟むことを寧ろ助かつたと感じてゐた。殊に、己の家族が戮せられて再び漢に戻る氣持を失つてからは、一層この「漢節を持した牧羊者」

との面接を避けたかつた。(二)

ここで、李陵が蘇武を「漢節を持した牧羊者」として意識していることに留意しておかねばならない。李陵は、蘇武と会う以前から既に固定した蘇武像を生成しており、彼を漢の価値観を体現する者として位置付けていることが窺える。その意味合いを強く持つ蘇武を李陵が「避けたい」と思うのは、その蘇武によつて自分が対象化されることを恐れている心理の反映である。つまり、李陵は自分が他者によつて対象化され、しかも漢の価値観による眼差しに晒されることを拒否しているのである。更に、右記二重線部における李陵の言葉に着目すれば、蘇武を「避けたい」という氣持ちは、李陵が匈奴に降つた以後のものであることが明らかである。すると、李陵は「如何に無情な批判者と雖も、尚、その「やむを得なかつた」ことを認める」といった〈確信〉を持ちながら、その裏に「やむを得なかつた」とはいえ、「匈奴への降服といふ己の行為」が果たして許される行為なのかという懷疑も同時に彼の中に存在していると言える。しかし、この唯一の掘り処でさえ剥奪されてしまうと、今まで持つて来た〈自己像〉——「士」、「正しい」自己——の崩壊に直面しなければならなくなる。

言い換えれば、李陵が蘇武を避ける理由は、蘇武という他者の眼差しから見られることで、自己が対象化されるのを恐れているだけではなく、その対象化された自己を意識するこ

とよつて、自らが保つてきた「自己像」——「決して非なりとは思はない」という「確信」が崩壊をきたすことを恐れているのである。そのような「恐れ」を持つことによつて、彼は蘇武との対面を意識的に拒否しているのである。彼の中では、このように「確信」と懷疑が葛藤している。以下、論述の手続きとして、自らを「士」と見なす自己像を「自己像」と表し、彼が想像した、又は意識した他者の目に映っている彼を《自己像》と表する。

何を語るにつけても、己の過去と蘇武のそれとの對比が「一々ひつかつてくる。蘇武は義人、自分は賣國奴と、それ程ハツキリ考へはしないけれども」（中略）それに、氣のせゐるか、日日が立つにつれ、蘇武の己に對する態度の中に、何か富者が貧者に對する時のやうな——己の優越を知つた上で相手に寛大であらうとする者の態度を感じ始めた。（三）

彼は「それ程ハツキリ考へはしないけれども」とことわつたものの、「蘇武は義人、自分は賣國奴」と対象化される自己に氣付いたことは否めない。「やむを得ぬ」に依拠し、「正しい」と固持してきた自己は、他者の目にはあくまで同情される対象に過ぎなかつた。自らが「確信」した「自己像」と齟齬するものを見出すたびに、彼の懷疑はますます肥大し、それにつれて蘇武の姿は更に理想化されていくのである。

「李陵」論において、「蘇武は李陵の幻像として存在し、

その幻像たることにおいて李陵を裁き、追いつめ、暗い懷疑につきおと」^①すといった蘇武像が根強く存在してきた。しかし、ここで強調したいのは、蘇武は、単に李陵に現実を突きつけるものとしての存在なのではなく、李陵もそれを消極的に受け入れるだけではないということである。つまり、今まで「考へることの嫌ひ」だった李陵は蘇武によつて自己の行為を顧み、問い直し始めたのである。

まず、李陵は「困苦・缺乏・酷寒・孤獨」と對峙する蘇武を見て、「此の男は何を目あてに生きてゐるのか」と怪しむ一方、自分にも同様の問いを投げかける。李陵の答えは「何時の間にか此の地に根を下して了つた數々の恩愛や義理のためであり、又今更死んでも格別漠のために義を立てることもならないからである」というものだった。この時点の李陵と、單干の帳房で目を覚ました時の李陵はつながっていることがわかる。いずれにおいても、祖国に正しく評価されるかどうかを意識し、それを前提として行動を取っているのである。

ところが、目を重ねていくと、李陵は蘇武の姿を通して、自らの内面の奥をますます探っていくようになる。李陵は「人に知られざることを憂へぬ蘇武」像を見出すことによつて、かつて先代單干の首を狙ひながら、「漠に迄聞えないであらうことを恐れて、竟に決行の機を見出し得なかつた」自らの行動を相対化し、「人に知られざることを憂へ」る自分を發

見したのである。つまり、今まで自分がしてきた、国のためにといた純粋な行為の裏に、俗世間の名誉や利得に執着する一面が潜んでいることに気が付いたのである。

しかし、最も彼を追いつめたのは、武帝の死に「血を嘔く」にいたる迄慟哭する蘇武を前にして、「一滴の涙も泛んではない」自分には漢への愛情が欠如しているのではないかという「暗い懷疑」であろう。自らの尽忠行為は漢への愛情に由来すると信じてきたが、その内実を蘇武といった鏡の前に置かれると、実は「節」や「義」といった世間の名誉を狙ったものであり、「外から押しつけられたもの」でしかなく、漢への「最も親身な自然な愛情」ではないことを突きつけられたのである。

一方、前述したように、李陵の中では常に「確信」と懷疑とが同時に存在している。ただ、「確信」の方は表面に出ているが、その懷疑の方は恐らく彼の内奥にあると考えられる。しかし、ここで彼は初めて心の内奥にある懷疑を意識し、それを「暗い懷疑」と言葉にしたのである。蘇武との対面によって促された自己追及は、むしろ李陵にとっては通過点であり、その洗礼を受けることで初めて彼は今まで拒否し続けてきた他者の目に見られる《自己像》——「賣國奴」、匈奴化した自己を受け入れる可能性を手に入れたのである。

李陵は任立政の帰国勧誘に対して、「丈夫再び辱しめらるゝ能はず」と答えて謝絶した。「暫く立政を熟視してから、

己が髪を撫でた。その髪も椎結とて既に中國の風ではない」とあるように、李陵が自らの髪を撫でたという行為は、李陵の決定において極めて重要な意味を孕んでいる。前述したように、語り手は彼が身拵えという外側から徐々に匈奴化していく《現実》を入念に語っていた。だが、それらはすべて語り手の視線によったものであり、李陵の内面はあくまで「ハツキリしない」状態にあった。しかし、蘇武を通じて自己追及をしたことによつて、李陵は外側の自己⇨匈奴化した自己、ひいて言えば、他者の目に見られている自己を認知した。それは今まで《確信》⇨「やむを得ぬ」によつて拒否してきた《自己像》でもあった。そこで深い意味を持つてくるのは、彼が「辱しめ」という言葉を二回も発したことである。検討したように、「辱しめ」といった発想は漢というイデオロギ―に由来したものであり、「土」と表裏一体の関係であった。李陵は匈奴化した自分、漢の視点から言えば「賣國奴」としての自分を認知したにもかかわらず、漢の規範を捨てきれなかったのである。

今度李陵が選んだ道は、「人に知られざる」生き方である。なぜならば、帰国を拒否することは、自らの「土」としての規範に基づいて取った行動である一方、漢との決別にもなり（漢の観点から見れば、李陵が帰国を拒否することは匈奴を選ぶことになる）、「國士」として顕彰されることは無縁のことになるからである。

「天は矢張り見てゐたのだ」と、蘇武が漢に帰れることを知った李陵は、「天」を見出した。李陵は、蘇武によつて促された自己省察を通して、今まで正しいと思つてきた自分の過去を恥ずかしく思うようになった。その「天」は過去の彼を否定するものである一方、彼の再生をも促すものになる。別れの際に、李陵は蘇武に言いたいことは山ほどあったが、結局それはすべて「胡に降つた時の己の志が那邊にあつたかということ」につきるので、彼はつい一言も言わなかった。そのような反省の一面をみせる李陵を見れば、彼は族滅以来抱えてきた、故国に裏切られた憤怒や、心の奥に抱いてきた懷疑から解放されたと言えよう。しかし、このように「暗い懷疑」から解放され再生の可能性が見出せるようになった一方で、蘇武の帰国を最も「こたへた」ことと思ひ、「胸をかきむしられる様な女々しい己の氣持が羨望ではないか」という李陵の内面は、過去への未練がまだ根強く残っていることを示唆している。

五、修史の機能

漢の宮廷で佞臣の迎合を罵倒し、武帝の逆鱗に触れた司馬遷は、確かにその場面においてある種の「英雄性」^②を獲得したと言えるかもしれない。恐らく司馬遷自身も「士たる者」としてすべきことを爲したゆえ、一種の自己完結した満足感

を得たのであろう。しかし、語り手は、読者に「英雄」といった司馬遷像を持たせようとしないのである。「をかした事に、李陵の家族よりも司馬遷の方が先に罪せられることになつた」と一見、司馬遷寄りの語り口に見えるが、後の叙述を見れば、むしろ司馬遷を突き放す語り手であることがわかる。後代の我々が史記の作者として知つてゐる司馬遷は大きな名前だが、當時の太史令司馬遷は眇たる一文筆の吏に過ぎない。頭腦の明晰なことは確かとしても其の頭腦に自信をもち過ぎた、人づき合ひの悪い男、議論に於て決して他人に負けない男、たかゞ強情我慢の偏屈人としてしか知られてゐなかつた。彼が腐刑に遭つたからとて別に驚く者は無い。(二)

語り手は、まず司馬遷に対して一般的に持たれがちなイメージ、つまり、史記の作者として知られている「大きな名前」を持つ司馬遷ではなく、波線部の通り「當時」の人々が見た司馬遷像をつぶさに再現しようとする。宮刑を受けた司馬遷は、自分が「當代の如何なる武人よりも男であること」を確信し、そして、「如何に彼に好意を寄せぬ者でも認めない譯には行かない」と断言したが、右記の傍線部は、彼の確信を徹底的に覆したものであつた。

更に追い打ちをかけたのは、彼が弁護した李陵は、彼が宮刑を受けたことを知つても、司馬遷を「厭に議論ばかりしてうるさい奴だ位にしか感じてゐなかつた」ため、「別に有難

いとも氣の毒だとも思はなかつた」ことである。語り手は、第二章で司馬遷の内面に寄り添い、彼の理想、苦悩、挫折に共感する姿勢を打ち出す一方、「當時」の人々の視点を導入し、「英雄性」を獲得した司馬遷像を反転させ、相対化させている。そこで照らし出されたのは、司馬遷の認識する「自己像」と周囲の認識する彼との間には相当のズレが存在しているということである。彼が自らに抱いた「自己像」——「慷慨の士」は、あくまで自らの世界の中にしか存在しない。語り手が饒舌に「當時」の人間が見た司馬遷、いわば「強情我慢の偏屈人」といった一面を語ることによって、司馬遷の自己認識、ひいては「如何に彼に好意を寄せぬ者でも認めない譯には行かない」という自信が、如何に狭窄であり、誤謬であるかが浮き彫りになるのである。

「今度の事で、己の如何にとるに足らぬものだつたかを沁々と考へさせられ」、「所詮己は牛にふみつぶされる道傍の虫けらの如きものに過ぎなかつた」といった認識を手に入れた彼は、初めて自己と他者の間にある距離を意識したと言えよう。

本来、自らの信念に基づけば、司馬遷は命を絶つはずであつたが、命を越える「絶對」である修史との「宿命的な因縁」のため、彼は自らを殺すことができないのである。生き延びることになった彼が直面しなければならぬのは、自らを苦しめる苦悩と恥辱に満ちている現実である。言葉を換えて言

えば、他者の目に映っている《自己像》である。官刑を受けた直後に司馬遷は、「生氣のない・魂迄が抜けたやうな顔をした男が三四人、だらしなく横たはつたり坐つたりしてゐるのが目に入つた。あの姿が、つまり今の己なのだと思つた時、嗚咽とも怒號ともつかない叫びが彼の咽喉を破つた」（傍線部引用者）と、自らの視線や考えに基づいて、他者の目で自分がどのように見られているのかを推察している。彼がその他の者の目に見られる《自己像》を察した時、叫びが「咽喉を破つた」のは、彼が最も受け容れられない事実——「士」ではなくなることを突きつけられたからである。

そこで彼が選んだ方法は、自分を「亡きもの」と見なし、外界との交渉を絶つことであつた。自身を「知覚も意識もない一つの書写機械」と思いこみ、史記の世界に閉じこもり、外界との接触を拒否するのである。

官刑の辱しめに遭つた後、司馬遷は「今度の出来事の中で、何が——誰が——誰のどういふ所が、悪かつたのだ」ということについて考え始める。

動機がどうあらうと、このやうな結果を招くものは、結局「悪かつた」といはなければならぬ。しかし、何處が悪かつた？ 己の何處が？ 何處も悪くなかつた。己は正しい事しかしなかつた。強ひていへば、唯、「我在り」といふ事實だけが悪かつたのである。（二）

従來の論では、「司馬遷の再生はこの徹底した自己否定か

ら始まるのである。(中略)自己否定は、司馬遷の場合、「我」の抹殺であつた」^③というような見方が殆どである。しかし、「己は正しい事しかしなかつた」という言葉は、最後まで自分が「正しい」と堅持する司馬遷の「我」が消えていない証拠だと言つてよい。彼は官刑によつて「自己否定」をしたというよりは、むしろ自らの「我」が、漢の秩序と相容れないものだと認識した。武帝の意が秩序となる漢の宮廷、とりわけその世界では、それと相容れない「我」を有することが「悪かつた」のである。彼は、武帝の領略する現実の世界において自らの居場所を見出せなくなつたため、「身を亡き者」と見なし、「書中の人物としてのみ活き」ることを決めた。自らの心を史記の世界に固く閉ざした彼は、李陵のように他者の眼差しによつてもたらされる「恐れ」はない。彼は、「完全な沈黙」を守り、外界との交渉を拒否したため、他者の視線によつて対象化される恐れから解放された。史記の世界において、唯一彼を対象化できるのは、「文字」だけである。稿をつづけて行く中に、宦者とか閹奴とかいふ文字を書かなければならぬ所に來ると、彼は覺えず呻き聲を發した。(二)

史記の執筆という仕事によつて、「表現することの歡び」を發見した彼は、いささかの安寧の空間を得たが、完全に現実世界の残酷さから逃げおおせたわけではない。李陵は蘇武を通して過去の自己を省み、それを内面の奥へ奥へと決つて

いくことによつて、国のためにという思いの裏に自分のためという極めて個人的な欲望を剔出した。一方、司馬遷のみせた「反省」からは、彼の意識がまず(外)へ向けられたということに氣付く。まず、武帝であり、次に君側の奸臣や酷吏、「好人物」、最後に自分自身である。最終的に「牛にふみつぶされる道傍の虫けらの如き」の自己像を發見した司馬遷は、一見、自己と他者との間にある懸隔を縮める視点を手に入れたように見えるが、実は「正しい」自己を貫くため、他者との「對話」を拒否していたのであつた。その結果、司馬遷は「正しい」自己像を守りきつたが、それゆゑに他者との溝は決定的に越え難いものと化した。

列傳第七十太史自序の最後の筆を擱いた時、司馬遷は凡に凭つたまゝ暫く惘然とした。深い溜息が腹の底から出た。(中略)歡びがある筈なのに氣の抜けた漠然とした寂しさ、不安の方が先に來た。(三)

憑依した世界から去り、筆を擱いた瞬間に、彼は官刑という屈辱からの逃げ場を失う。彼を再び待ち受けているのは、かつての屈辱と苦悩に満ちた現実である。彼は残酷な現実の到來を予感し、完成の喜びよりもむしろ、未來に対しての「漠然とした寂しさ」と「不安」を強く感じてゐる。

司馬遷は、官刑のショックから自分を納得させるために、「今度のことは要するに天の作せる疾風暴雨霹靂に見舞はれたものと思ふ外はない」と「天」を見出して、自分の怒りを

おさめ「諦観」に向かおうとする。しかし、武帝の崩御にも昭帝の即位にも何の意味も見出さないうちになつたことや、忠臣や義士の書中人物に成り代わつて烈々と佞臣昏君を非難することから見れば、司馬遷は最後まで怨を抱いており、諦めの心境には迫り着くことができなかったと言つてよい。

李陵は、蘇武の姿を通して自分の行動を恥ずかしく感じ、自分が必ずしも正しいと思えないようになり、最後に「天」という存在を見出すことによつて得た諦観によつて、自らへの懷疑から解放されたと言えよう。一方、宮刑にあり、「我」を踏みつぶされた司馬遷は、史記によつて屈辱や苦悩からの逃げ場を得て、表現の「歡び」を発見した。しかし、蘇武と史記を通して、李陵と司馬遷はいささかの安らぎを取り戻したとはいへ、彼等は決して「士」としての自負が奪われた屈辱から抜け出すことができたわけではなかつたのである。

六、おわりに

従来の論考では、「司馬遷は『宮』の後に、世界を批評するのではなく述べるという方法で、(中略)『運命』を越えた。」しかし、李陵ばかりが「運命」のなすがままに翻弄されている⁽¹⁴⁾「司馬遷は屈辱に耐えて『史記』執筆に生きる意味を発見するが、李陵は生の根拠を発見できず『漠北』で迷い続ける」⁽¹⁵⁾といった論証をはじめ、多くの論は、帰国の有無や史

記の完成という「結果」から、李陵と司馬遷の人生を規定しようとしている。つまり、司馬遷は修史という事業の完成によつて人間としての挫折を免れ、蘇武は自己を貫き通して故国帰還の名譽に輝いたのに対して、修史の完成も故国帰還もない李陵には、挫折者としての生き方しか残されていないとし、司馬遷、蘇武を運命の勝者、李陵を運命の敗者と見なしている。しかし、留意しなければならぬのは、本作品の語り手が作中で対象としているのは、我々が持ちがちな歴史上名高い蘇武像と司馬遷像ではなく、「當時」の彼等であるということである。この点から見れば、本作品の主題は、決して勝者と敗者を描き分けるところにはない。むしろ、李陵と司馬遷が共通しているところにあると言える。

李陵と司馬遷は、「士」という自負を持ち、それに準ずる価値判断に基づいて行動したが、挫折した。その挫折によつて、彼等が持つていた〈自己像〉——「國士」「忼慨の士」——と相容れないもう一つの〈自己像〉、つまり他者の目に映っている《自己像》——「賣國奴」「閹奴」——に立ち向かわせられることになる。つまり、その他者にある《自己像》に対して如何に対処するかが問われたのである。本作品の結末の描写では、漢の規範を持ちながらも匈奴に生きることになつた李陵には「天下に顯彰される」日は訪れなかつた。彼は「何一つ正確な記録は残されてゐない」まま、胡地で死んだ。司馬遷は「漠然とした寂しさ、不安」を抱え、現実——「閹奴」

といった他者にある《自己像》との対面に立ち竦む。この結末からは、彼等はその答えを見出していないと言えよう。

本論では、従来「運命の悪意」がテーマだと考えられてきた「李陵」論を再検証することを出発点とし、それを分析することによって、李陵と司馬遷の運命を暗転させたのは「運命の悪意」というよりも、むしろ彼等の無謀な行為であることを明らかにした。その無謀な行為の背後に隠されていたのは、自らに期した《自己像》、すなわち「國士」「忼慨の士」であることに對する強い望みであろう。そして、このような李陵と司馬遷の姿を通して照らし出されたのは、自らが持ってきた《自己像》と他者にある《自己像》との間に存在する溝に苦しまされる人間の姿と言えよう。

注

(1) 一つは、原典『史記』『漢書』『文選』『任少卿に報ズル書』を参照することで、史実との相違点や中島の独創部分という観点から、「李陵」を説明しようとする原典との比較論。二つ目は、登場人物の中から主人公を特定する論考で、主人公二人説、三人説、四人説などがある。三つ目は司馬遷の「述而不作」をめぐる言説の背後に、〈作者〉中島敦の思想を解説しようとするものである。

(2) 北條博幸『「李陵」の世界——宙ぶらりの男・李陵——』『日

本文学論叢』八号、昭和五十五年一月。

(3) 勝又浩「『李陵』の構図」『日本文学研究資料叢書 梶井基次郎・中島敦』有精堂、昭和五十三年二月。

(4) 藤村猛「『李陵』小考——その本質と成立について——」『国文学攷』第九十九号、昭和五十八年九月。

(5) 秋元誠氏は、「悪意」はまず李陵の後塵を拝することを快しとしなかった路博徳の武帝への上奏文として現れる」と述べ、李陵の不運の起因を路博徳の上奏文に求めた。〔中島敦「李陵」試論——行為とその行方——』『富山工業高等専門学校紀要』第二十八号、平成六年三月〕。渡辺善雄氏は李陵の不運について、「李陵の場合、運命の悪意は老將軍路博徳の非協力に始まり、すべて予測を裏切る形でじわじわと現れる」と指摘し、秋元誠氏と同様の見解を示している。〔「李陵」ノート（上）』『月刊国語教育』第十五——七号、平成七年九月〕。

(6) 木村瑞夫「中島敦「李陵」論——行為と救済——」『学大国文』第四十号、平成九年二月。

(7) 「この單于の首を奪つても其れが漢に聞こえなければ云々」といった願慮は、對世間的な名譽心に捉われた、極めて個人的なもののようにも見える。そして、それは、先に見た第一節の李陵が持っていた「陵一個のこと」を顧りみない没我的な無私性とは、相容れないもののようにも見える〔越智良二「中島敦論——「李陵」に就て——」『愛媛大学教育学部紀要（第Ⅱ部人文・社会科学）』二十号、昭和六十三年二月〕。このほかに、奥野政

元氏の「李陵」——運命と自由」『中島敦論考』桜楓社、昭和六十年四月。初出「『李陵』ノート（一）」『活水論文集』第二十五号、昭和五十七年三月）で李陵の変容についての指摘がある。

(8) 「且つ夫れ孝は親に事ふるに始り、君に事ふるに中し、身を立つるに終る。名を後世に揚げて、以て父母を顯す、此れ孝の大なるものなり」『太史公自序』『漢文叢書 史記六』有朋堂、昭和二年十二月。

(9) 「僕之を聞く、脩身なる者は智の符なり。施しを愛するは仁の端なり。取與なる者は義の表なり。恥辱なる者は勇の決なり。立名なる者は行の極なり。士に此の五者有りて、然る後以て世に託して、君子の林に列す可し」『司馬子長報任少卿書』『新釈漢文大系第83巻 文選（文章篇）中』明治書院、平成十年七月。

(10) 前掲（3）勝又浩氏論。

(11) 石丸晶子「『李陵』の世界——転落した者たちとそのゆくえ」

『近代の文学——井上百合子先生記念論集』河出書房新社、平成五年八月。

(12) 仁科路易子「中島敦『李陵』の企み」『立教大学日本文学』第八十三号、平成十二年一月。「武帝の怒りを恐れて皆が李陵を罵るか口を噤んでいる中で、一人、李陵をほめあげる司馬遷は、この場面では英雄性を獲得していた」と述べている。

(13) 前掲（5）秋本誠氏論。

(14) 前掲（2）北條博幸氏論。

(15) 前掲（5）渡辺善雄氏論。

【付記】本文引用はすべて『中島敦全集Ⅰ』（筑摩書房、平成十三年十月）に拠った。傍点は作者、傍線は筆者に拠ったものである。

（りようしゅうけん／南台科技大学助理教授）